

ラジオ放送  
＜平成26年7月～10月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.408



## もくじ ~ contents

### <信心ライブ>

☞ 金光教の集会で行われた発表や講話などを紹介します。

- 第1回 お湯の心 *page 1*
- 第2回 心配は財産 *page 5*
- 第3回 光に向かって *page 9*
- 第4回 いつも心に神様を *page 12*

### <平和>

☞ 平和についてのおはなし

- 世界の平和を祈る  
金光教片江教会 山田金次 *page 17*

### <ラジオドラマ> 「毎度ご乗車ありがとうございます。」

☞ 「変わる」をテーマにしてラジオドラマです。

- 第1回 神様は見ている *page 21*
- 第2回 展望車の眺め *page 27*
- 第3回 Mr.棚卸し *page 33*
- 第4回 生命いのちときめく希望のかけ橋 *page 39*
- 第5回 ちょっと一服 *page 44*
- 第6回 舞い降りた花びら *page 50*
- 第7回 いつまでもいつまでも *page 56*
- 第8回 みんな英雄 *page 63*
- 第9回 危うくキタマクラ *page 69*

## 《信心ライブ》第一回

### 「お湯の心」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、広島県・金光教田熊港教会の佐藤光平さんが、平成二十四年一月七日、金光教本部で話されたものをお聞き頂きます。

皆さんは、善かれと思つて相手にしてあげたことが、お節介になつてしまつたり、反対に、相手がせっかくしてくれたことを疎ましく思つたりしたことはありませんか？

これからお聞き頂くお話は、どうすれば日常生活の中で、周りの人と気持良く接することが出来るのか、そのヒントを教えてください。

は、聞いてみましょう。

私は、み教えの中で頂いているもの、稽古をさせて頂いている中身があります。「日々信心している者は、湯をわかしたら湯で使うがよい。水にしないようにするがよい」と、脳髓にしみこんだみ教えがあるわけなんです。

その中で、湯というのは温かい心、水というのは冷たい心だと私は、理解させて頂いております。私も御用で出掛ける時に、お広前でね、「ただいまから出発させて頂きます。ありがとうございます。どうぞ道中、けが過ちなく出発させて頂きますように」と、言うて出るんですね。湯の心で出発させて頂いても、自分にスピードの合わない、車が前におつたら、「早よ行

けばええのに」というねえ、水になってしまふ心が恥ずかしいなと思うわけなんですけどもね。

あるラジオ番組を聞かせて頂きました。ちょっと自分の不満をね、ラジオに投稿して、言うんですね。ある奥様が風邪を引いて調子が悪い。でも一生懸命食事を作ってご主人の帰りを待っておったんです。

ほいで、「お父さん、今日はちょっと調子が悪いから早く休ませて頂きますね」。「ああ、無理するなよ」ということだったんです。

それで、明るる朝、ご主人が起きる気配がない。まあ少し熱も下がったから、まあ仕方がない、朝食の準備でもって、起きられたんです、奥さんがね。で、ご主人は黙っていつもの通り

に黙々と食べて、出発前に、「無理するなよ」と言うて出掛けて行ったらしいんです。まあ、それでも朝食の後片付け、洗濯をして干してからね、さあちよつとしばらく休ませてもらおう思って、寝室に行ったらね、布団が畳んであったというんです。今までのことがないご主人が、布団を畳んどいたららしいんです、その時に限って。

それに腹を立てたらしいんですね、奥さんが。「いらんことをしてから」という思い。今から寝よう思うとつたのに、布団が畳んであったというんです。

でも、私はそれを聞いた時にね、ちよつと湯の心で聞かせてもろたら、「待てよ」となるんです。今まで畳んだことのないご主人が、布団

を畳んだということは、奥様の体を氣遣こうてのことなんでしょ。それを氣付かなかったんですね。奥さんは、「さあ寝よう」思ってた時に、パツと水になったんでしょね。「あの、くそったれが」と言やへんかも分からんね。「いらんことしてから」という思いかも分からんです。でも奥さんが、湯の心であれば、「ああ、お父さん、私のために布団を畳んでくれたんじゃ。帰ったら、ありがと言わんといけんね」という思いでご主人を待つのか、水の心で、やっつけてやろうという思いで、夕方まで、そういう心で待つのか。ねえ。

私も経験があるんですよ。教会は大祭というのがありますよね。大祭になるとやはり狭い教会ですから、念入りに掃除させてもらう、掃除

させてもらうとゴミが出る。ちょうど明くる朝が燃えるゴミの日だったんです。家内は家内の方の周りの掃除をしとる、私は私の周りの掃除をさせてもらう。「あ、このゴミ袋もついでに捨ててやろう」と、湯の心ですよ、親切なんですよ。「これも一緒に持ってってやろうと思って、そのゴミも一緒に持ってったんですね。で、しばらくすると、「お父さん、ここにあった袋は？」言うて、「あれゴミだと思って捨ててしまった」。「これから仕分けしようと思うとって、取ってきたわけなんですよね。

私も尋ねればよかったですね。「おい、これ一緒に捨ててこようか？」と言うたら、「いや、お父さん、それはまだ仕分けするから、あ

りがとう、私が後から捨てるから」という思い  
かも分かん。尋ねれば、済んだかも分かん  
のですよね。でも、私は親切の心で捨てに行っ  
たんがね、それが駄目になったんですね。「こ  
れから仕分けしよう思ったのに」って、私の  
親切、お節介になったんですね。

いかがでしたか？ 親切とお節介の境目っ  
て、どこにあるんでしょうね？ 我々も、普段  
経験させられる、とても悩ましい問題です。お  
話の中では、お湯の心になれば、相手がお節介  
でも、親切に受け取ることが出来るのではない  
かと教えて下さっています。

そのためには、朝、目が覚めたら、まず初め  
に、お湯を沸かしてみるのはいかがでしょうか。

お湯を沸かすといつても、本当にお湯を沸かす  
んじやなくて、自分自身の感情を温めて、心を  
お湯にしてあげるんです。生活の中で、「もう、  
お節介しやがって！」という感情が出てきたら、  
お湯が冷めてきた証拠です。その時には、「お  
湯の心、お湯の心…」とつぶやいて、神様に心  
を向けてみましょう。きつと、また心が温まっ  
てくるはずですよ。

逆に、相手が、水の心になっているなあと感  
じたら、お湯の心で、相手に接してみてください。  
お湯の心が伝わり、みんなの心が温かくなって、  
どんどんとポカポカした世界が広がっていけ  
ば、素敵ですね。

では、皆さん、ホットな一日をお過ごし下さ  
い！

「心配は財産」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録

音で紹介する「信心ライブ」。今日は、大阪府

鶴町教会の藤坂金生つるまち ふじさか かねおさんが、平成二十五年四月

に、金光教鳳教会でお話されたものをお聞き頂

きます。

皆さんは「心配」という言葉に、どんなイメ

ージを持っていますか？ お話の中で藤坂さん

は、心配についてどのように言われたのか、ち

よつと聞いてみましょう。

神様は、私たち人間の親であると教えて下さ

っております。親神様、と金光教では神様のこ

とを申したりします。神様が親で、私たち人間は子どもであると教えてもらうんであります。この親神様のお心があるからやと思うんであります。

私たち一人ひとり、神様から思われて、願われて、ここにおる私たちである。そのことを改めて確認させて頂かならんなあ。神徳の中に生かされてある、いうのは、いつも神様が心配して、いつも神様が挿んでくれている時であります。

長いこと信心してきた、うちにお参りしているおばさんが、「先生、私は長いこと信心してきました。で、今までも何回もおかげ頂いて、神様に助けてもうてきました。それでもまた、子どものことで何か起こってきましたら、心配

で心配でしょうがありません」いうて、そんなことを言うんであります。

その時に、「あ、そうや」と思った。「その心配な時こそ、神様があなたを拜んでくれる時ですよ」と言いました。そしたら、そのおばさんは喜びました。

私は、「あ、そうか」と思った。その人は、心配で、心配で、自分の体を痛めてしまうくらい心配性な人であります。でも、「この心配性は、あなたの才能ですね」。なんかそんな言葉がふと、私の中から出てきたんであります。

「いつもあなたは子どものことを思いますね。私は、結婚もしてません。子どももおりませんから、私にはまだ分かりませんが、それだけ心配するほど、子どもを思えるということは、神

様から頂いた、大切な、子どもを愛おしいと思う、子どもを大切に思う、あなたの財産ですね。

ですから、心配が出てきたら、『神様ありがとうございます。子どもを心配させてもいます。子どものことを心配させてもいます。子どものことを思える心を私は頂いております。神様、この心配が起きましたら、私のことをあなた様が拜んでくれている時ですね。私もその心と同じになりまして、子どものことを祈らせて頂きます』と心配が出てくる度に、神様にそう祈ってあげて下さい」と言いました。

「そしたら段々、あなたの心配性も和らいでいき、体を壊すまでの心配はなくなっていくように思います。心配性はあなたの宝物です。財産ですから大事にして下さい」と言うてお話を

させて頂きました。

そのおばさんはそれから、ニコニコ、ニコニコ元氣にお参りしてきます。今でも、「心配です、心配です」言うて、時には、「しんどいなあ、つらいなあ…」そんなこともあります。また私と話をして、その昔のことを思い出しながら、元氣を出して信心をしてくれております。

その一つひとつ頂いているもんを伸ばしていくということが大事ななあ思います。私たち一人ひとり、それぞれ別々のありがたいものを神様が下さっております。それが目覚めていくような心の使い方、あり方をしていって、自分で自分を元氣付ける、励ましていくような、そういうおかけを頂いていきたいと思えます。

神様はいつも私たちを思い、願うて下さって

おる、そのことだけ一つ覚えておいて頂きたいと思えます。

「つらいなあ、どうしようもないなあ」いう時こそ、神様が拝んでくれている時である、そう思い出して下さい。そして、それでも辛抱たまらない時は、教会へ来て、先生にお話を聞いてもらって下さい。一緒に神様に拝んでもらって下さい。先生は一生懸命に神様にお頼みして下さいます。よう聞いて下さいます。これが私は、金光教の教会の一番ありがたいところやと思わせて頂いております。

いかがでしたか？ 実は私も今、子どもこのとで悩んでいます。勝手なもので、自分が子どもだったころは、親に対して、「何でお母さん

は心配ばかりするの？ 理解出来ない！」なんて思っていました。親になって初めて、母の気持ちがいほど分かるようになりました。

藤坂さんのお話の中で、子どものことが心配でなりませんというご婦人が出てきますが、私は自分のことと重ね合わせて聞きました。心配が体に良くないのは当然です。だけど、心配してしまうんですね。そんなご婦人に対し、藤坂さんは次のように言われていました。「それだけ心配するほど、子どもを思えるということ、は、神様から頂いた大切なあなたの財産ですね。子どもを愛おしいと思う、大切に思う心を、神様から頂いているんです。心配が出てきたら、神様も同じぐらい、あなたのことを思って、拜んで下さっていますよ」とおっしゃいました。

心配性で苦しむ気持ちを丸ごと受け止めて下さり、寄り添って頂いているような、懐の大きな親神様の愛を感じました。心配というのは簡単に消えないでしょうが、すがる気持ちを繰り返す中で、いつか、心が落ち着いていき、安心に変わる日が来ることでしよう。



「光に向かつて」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、福岡県・金光教行橋教会の井手美知雄さんが、平成二十一年十一月、金光教富山教会で話されたものをお聞き頂きます。

私は子どもが三人。一番上が三十です。次が二十八。その下の末が長女で二十七歳で、なのと申します。その子が生まれましてね、大概まあ、三、四カ月、半年も経ちますと寝返りを打ちますよ。ところが、寝返りを打たない。あまりに寝返りを打ちませんので、これはどうも

おかしいということ、子ども専門の子ども病院に、一カ月ほど検査入院を致しました。

呼び出されて行きましたら、「脳波が乱れております。脳波が乱れるために二つの症状が出てまいります。一つは、体幹機能障害。もう一つは言語障害。そういう重複の障害が起きます」ということでありました。要するに、歩行困難であったり、認識する力が弱いから、言葉を覚えるというのがなかなか難しい、ということ、事実、その通りになっております。

三歳くらいの子どもになりましたら、排泄も自分で行ったり、ご飯も自分で箸を使って食べるとか、スプーン使って食べるとか、色々出来ることが広がっていくんですが、そういうことがうちの子どもにかなわないわけですね。

二歳、三歳のお子さんが当たり前に出来ていくことが、自分の子どもにかなわないということになりますと、「どうしてだろうか」という思いがたまっていけますね。そしてね、それこそ心の真ん真ん中の器に、始終つらい思いが渦巻いているような状態になつとる。

そういう時に、前の四代金光様にお届けにあげりました。

「お礼を申し上げることが先で、嘆くことは先では順序が違ふんです。お互いに教祖様の信心をしておかげを受けるんです。教祖様の信心と言ったら、『信心する者は、たとえ木の切り株に腰を下ろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれよ』と教えて下さった。お礼を申し上げることが先であつて、嘆くことが先に

なるんでは、信心の順序というものが違うのではないでしようか」。こういうお言葉を頂きました。

そうなんです。自分はこの子を、嘆きの種、悲しみの種、つらさの種、そういうふうに見ているんだけど、金光様の方から見れば、喜びの種、いのちを頂いている種、どうあつても、今日のお生かしを頂いていることを寿イサナヒがなければならぬはずの種。そう思いまして、喜ばしいところね、思いを、向きを変えさせて頂こうと思ひました。

長女は当時、養護学校の小学部に通う年頃になっていました。ある日、二学期の成績表を頂きました。普通の小学生の通知表でしたら「5、4、3、2、1」とか、「よくできました」「○」

とかいのですが、養護学校に行く娘が頂いてくる成績表は、「今学期は点と点を結ぶ、点結びが出来るようになりました」とか、「ハンガーに洋服を掛けることが出来るようになりました」とか、そういう出来たことを、ザアーツと書いてあるんです。

私はその成績表を初めて見るわけではないんですよ。前にも、そういう成績表を見ている。最初の一年の時の成績表も、「できました」ということが書いてあるんですよ、本当は。だけど、私がそういう目で見てない時には、出来ないことばかりに力を入れて、出来得ていることこそ、あるいは幸せをこそ探さなくてはならないのに、全く同じ目を持っておりますのに、暗いところばかりを見ているようなことでした。

心を、喜ばしい、出来得ている方に向けさせてと思うた時に初めて、その成績表の輝いている部分が目に入ってくる、ということなんです。難儀の元を探すのではなく、おかげの元を探せ。暗闇の方に心を向けるのではなくて、光の方に向かって進みなさい。光に向かって進めば、おかげは必ずついてくる。そういう気持ちで心に座っていくようでありたいということを思うのであります。

心の中心に何を据えるのか。それで、ずいぶん生き方が変わってくるんですね。ほんのひとかけらでもいい。喜ばしいことを心の真ん中において、幸せに満ちた生活を進めていきましよう。

《信心ライブ》第四回

「いつも心に神様を」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、岡山県金光町にお住まいの金光紀子こんこうのりこさんが、平成二十五年三月に福岡県で開催された集会でお話されたものをお聞き頂きます。

金光教本部にお勤めのご主人と、五人の子どもがいらっしやる七人家族の紀子さん。子育てを通して感じている信心の大切なところをお話されました。

「信心の稽古はお礼の稽古」と言ってもよいかもしれません。ですので、親子でどんなささ

いなことでも、例えば、ティッシュ一枚取ってもらっても、必ず、「ありがとう」と言うように気をつけています。たまに子どもが、「ありがとう」と言い忘れることがあります。そんな時にこっちが、「ありがとうは？」と言うと、なんかちょっと恩着せがましい響きになってしまつて、どうも、ちょっと自分の中でなんか気持ちが悪くないなあと思つていたんですけれども、ある時に、ああ別にこっちから、「ありがとう」と言わせてもらつても、やってあげた方から言つてもいいんだと思つて、子どもが忘れていた時に、こっちから、「ありがとう」って言つてみたら、もう本当、予想以上にとても気持ち良かったんですね。

でも考えてみれば、もう子どもの存在自体が、

「ありがとう」だと言ってもいいくらいのもの  
だなどと思って、何回言わせてもらっても言い過  
ぎということはないなあと思って、子どもが、

「あつ、また言い忘れたぞ」と思ったら、こっ  
ちから、「ありがとう」と言ったら、ちょっと  
子どももビックリしたような顔をしながら、「あ  
あ、ありがとう」と言って、慌てて言うような  
感じで、まあそれを根気強く続けていると、だ  
んだん何かしてもらって黙っているのが気持ち  
悪いという感覚も芽生えてくるみたいで、お礼  
を言わせて頂くとということも、なるべく小さい  
うちから習慣化することが大事なのかなという  
ふうに思わせて頂いております。

次に、子どもに神様のことをどのように伝え  
させて頂くかということです。これはとても大

きくて難しい問題なんですけれども、我が家で  
は、今日もあそこに一緒に来ている1歳の末っ  
子が、とても大きな役割を果たしてくれていま  
す。

例えば、ある時に、上の子どもが、一歳の子  
どもは育乃という名前なんですけど、「育乃が  
可愛くて可愛くてしょうがない」みたいなこと  
を言いました。私は、今がチャンスと思って、  
すかさず、「そうよなあ、ホント可愛いよなあ。  
神様もこんな気持ちであなたたちのこと見て下  
さつとるんよ」っていうふうに言わせて頂きま  
した。子どもの中に芽生えた、心の底からの可  
愛いと思う心、そういう心を通して親神様のみ  
心が少しでも分かせて頂けたらいいなあとい  
う思いからでした。

また、一歳くらいになってヨチヨチ歩き始めると、床の上の物につまずきそうになったり、テーブルの角で頭をぶつけそうになったり、とにかく危なっかしいです。そこで、上の子どもたちがせつせと障害物をどけてやったり、机の角にパッと自分の手をかぶせて、角に頭をぶつけないように、一生懸命気を配ってやっていきます。

もちろん一歳の子どもですから、そんな周りが一生懸命動いてくれていることなどは全然気にも止めずに自分はやりたいこと、好き勝手に動いているんですけれども、そういう時にも、上の子たちに、「神様もね、みんなのことをこんなふうに、きつと守って下さっているんだと思うよ。でも、育乃ちゃん小さいから、全然

気付いてないし、お礼も言わないけど、あんたたちは大きいんだから、神様にちゃんとお礼言わしてもらおうね」みたいな感じで言わせて頂いています。神様と言っても、遠い所におられるんじゃないくて、自分の心の中にもいて下さっているんだということに、子どもたちも少しずつ気付いてくれたらありがたいなと思っています。

また、子どもが赤ちゃんのころから、夜寝る前に神様に拝礼する時に、毎日お願いしている三つのことがあります。それは、「元氣でお役に立つ人にならせて下さい」「良いご縁を頂かせて下さい」「世界のみんなが幸せになりますように」ということです。

最初の「元氣でお役に立つ人にならせて下さ

い」。これは、勉強でも運動でも習い事でも、自分のためだけにするんじゃないなくて、神様のお役に立つ人にならせて頂くためにするんだというのを忘れないためです。

二つ目の「良いご縁を頂かせて下さい」。これは、人生の中でどんな友達や、どんな先生、どんなお嬢さんやお嫁さん、どんな子孫に出会うかということは、自分の力だけではどうすることも出来ない、まさに神様のご領分ですけれども、ご縁の善し悪しで人生が決まると言ってもよいほど大切なことなので、小さいうちからと言いますが、生まれる前から、「良いご縁を頂かせて下さい」ということもお願いさせて頂いています。

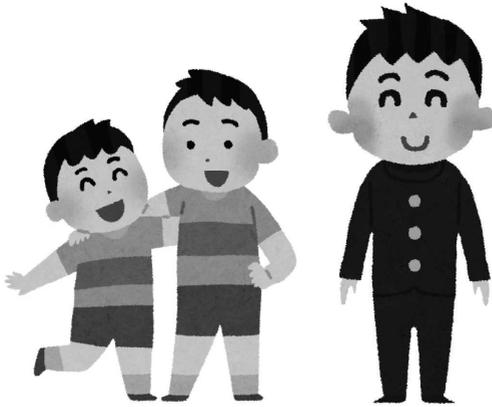
で、三つ目の「世界みんなが幸せになりま

すように」という、これは、教組様の「総氏子身の上安全、世界真の平和」の祈りを、子どもにも分かり易い言葉にさせて頂いたものです。自分や家族だけではない、世界みんなが神様の大切な子どもで、いろいろな難儀に直面されている世界の方のことを、幸せを祈らせて頂く、ということに取り組ませて頂いています。

紀子さんはお母さんから信心を受け継ぎました。お母さんの言葉やあり方から感じ取った、「このお道の信心ほどありがたいものはない」ということを、今度はご自身の子どもに伝えていきたい、そんな思いを持ちながら過ごしておられる、楽しくにぎやかな日常生活を披露して下さいました。

お礼の心を現すことは、神様に対して、人に対して、物に対して、日常生活の中にいくらかもあるんですね。

私も日常の中にたくさんあるはずの喜びに気付いて、お礼の稽古を重ね、自分の心の中の神様を輝かせ、現していきたいと思いました。



《シリーズ 平和》

## 「世界の平和を祈る」

金光教片江教会 山田金次

おはようございます。今朝も穏やかな気持ちに包まれて目覚めさせて頂き、有り難いことです。

私は、大正十二年生まれで、昨年の四月十日に満九十歳、卒寿を迎えさせて頂きました。私たちの年代は、中学校で軍事教練を受け、成人すれば軍隊に入隊する時勢でした。中には中学校卒業前に軍隊に志願する人たちもおりました。

私が二十一歳の時、第二次世界大戦の戦局が厳しくなった折、昭和十九年一月十日に召集を

受けました。第一線出陣の部隊に入隊するや、直ちに武装準備を終えて、両親との面会が許され、別れを告げ、早々、同月二十日の朝、大阪を出発いたしました。

朝鮮半島を北上し、一週間掛けて中国中部の南京に到着いたしました。翌日から、揚子江を船で三日間掛け、九江という地で幹部候補生の試験を受けました。

私は、その試験に合格し、歩兵砲隊に配属になりました。皆に助けられ、六カ月間の教育を受けて、ちょうど入隊以来一年目の昭和の二十一年一月十日、南京にある陸軍士官学校歩兵砲隊に入学しました。

その後、私は安義という地で歩兵砲隊第二小队長として、初年兵の教育と地域の警備、治安

の維持に努めました。安義の地区には水の豊富で綺麗な安義川が流れており、歩兵砲隊はその川辺に兵舎があり、水に恵まれておりました。

農村では大切な池も多くありましたが、水道、電気が整備されておりません。夜はランプの明かりの生活で、飲料水はドラム缶に砂と細かく砕いた炭を交互に入れて、川や池の水をろ過し、沸かして飲んでおりました。その作業を村の大人も子どもたちと一緒に珍しそうに見に来ておりました。

洗い物、洗濯はみな川や池です。また各家庭には風呂がありませんでした。お金に余裕のある人は温泉へ行きますが、一般の人たちは川や池の水を沸かして体を拭くのです。それも女の子が優先されます。男の子は川や池で体を拭く

んです。冬は出来ません。我々がドラム缶で風呂を作るのも珍しそうに見に来ておりました。

しかし、そのころ、中国軍は米軍の援護の下、その戦力ははるかに我が日本軍を上回り、かつ米空軍の戦力は目を見張るものでありました。日本軍も多くの死傷者が出る戦況となりました。

その戦禍は、戦う日本兵だけでなく、一般の中国人の皆さん、特に高齢者、子どもたちに数多くの犠牲者が出たことは、実に悲惨な出来事でした。

また、内地では、大都市の大空襲での多くの犠牲者があり、特に広島・長崎が原子爆弾による被害で、それはそれは多くの人たちが尊い命を亡くされました。

そして、八月十五日、日本国が経験のない無条件降伏をして、終戦となりました。

終戦後、私たちの部隊は、中国軍の要請で、そのまま安義の地に駐留し、周辺の警備と治安の維持を続けておりました。

昭和二十年十一月、いよいよ中国軍が進駐して任務を委譲し、兵器・弾薬・馬・食料を渡し、住み慣れた安義の地を出発して、他の場所に移動して留まることになりました。

中国軍の要請により、堤防工事など復員時まで続行しました。工事は中国人の方と一緒にするのですが、いつしか村の人たちとも打ち解けていました。一緒に作業をした人や村の人たちからも慕われ、敵対する者同士とは到底思えませんでした。

昭和二十一年三月、共産党軍と国防軍との内戦の兆しが生じた五月十九日、復員命令を受けて、三泊野營、四日目の二十三日、九江に到着しました。

揚子江を船で下り、南京から貨物列車で上海に到着。所持品検査を受け、六月二十九日、待望の内地にやっとの思いで、無事に帰国を果たしました。

この事實は、ひとえに神様のお働き、両親のお祈り添えがあればこそと感謝の気持ちで、日本の大地を踏ませて頂き、無事に帰還出来た喜びで胸がいっぱいでした。一人息子を戦地に送る両親の気持ちを察すると万感の思いが込み上げてきました。

しかし、初年兵で共に出発した戦友の大半が

第一線で尊い命を無くしました。

私は、軍隊生活は二年七カ月でしたが、その間、戦地で実践的な軍事教育を受け続けました。第一線には出陣しませんでした。戦地で戦友を失ったり、色んな出来事を見聞きしてまいりました。

「誰しも神様から同じように授かった命なのに…」と思うと心が痛みます。

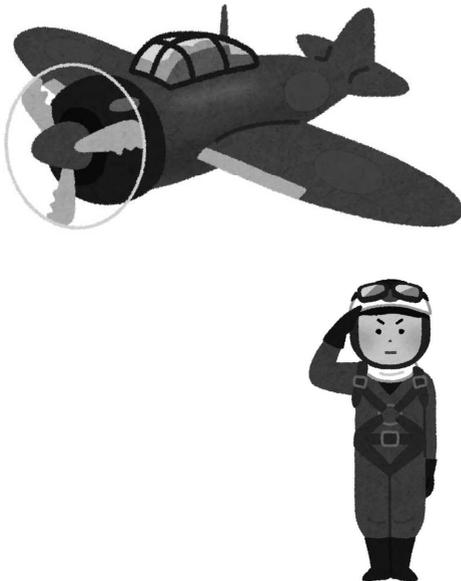
戦争ほど、愚かな、そして、悲惨なことはないと思います。特に、高齢者や子どもたちが犠牲になることが多いのが実態です。それが、今日も世界のどこかの国々で起こっております。実に悲しいことですね。

私は、日々神様に世界の平和を祈り続けております。そして、まず、身近な家庭から不和の

ないように家族中親切にし合い、仲良く心が一つになって、言い争いのなきよう、物事をこらえるよう努めることが大切です。

まず、家庭から世界へと平和の成就を願わせて頂いております。

ありがとうございます。



## 毎度ご乗車



ありがとうございます。

脚本 菊村きくむら  
禮れい

### 第一回

「神様は見ている」

#### 登場人物

- 美佐子（ヘルパー 三十歳）  
淑江（ヘルパー 四十歳）  
瀬川（建築設計士 四十五歳）  
男（酔っ払い 五十代）  
警官

ナレーション

ただ今より皆様を七分間の列車の旅へご案内致します。

それでは出発です。（電車の出発音）

美佐子

あー、疲れた、疲れたア。あつ、あいたつ、あいたつた…。うー、今日も働き通しで腰がミシミシ鳴っている…。

ナレーション（美佐子）

私は数年前より介護の仕事をしています。「ヘルパーさん」と呼ばれ、誰からも頼りにされ、やりがいがあるのですが、車椅子に乗せて押したり、お風呂に入れたりと、

一日の仕事を終えるとぐったりしてしまいます。

ない。あつ、着いたみたい。じゃ、また明日…。

ナレーション（美佐子）

先輩の淑江さんと乗り込んだ電車は空すいていて、二人とも席に座ることが出来ました。

淑江 どうかしたの？ さつきから浮かない顔して。

美佐子 あたし、盗んじやいないわっ。

淑江 えっ、何の話？

美佐子 山田さん家ちのお婆ちゃんが、お財布が無くなったって今朝から大騒ぎ。

淑江 あんたが盗んだに違いないって。でも布団の中から出てきたのよ。よくある話。気にしない、気にし

いくら先輩に気にすると言われても、盗つ人呼ばわりされた私の胸の内は、怒りと屈辱で煮えくり返っていました。先輩と入れ違いに私の隣に腰を下ろしたのは、きちんとした身なりの男性でした。男性は、すぐにカバンから書類を取り出し、読み始めました。その時、隣の車両からヨレヨレのコートに擦り切れた靴といういでたちの初老の男が移動してきて、その男性の前に立つや…。

男 オホッ、オホッ、ゴホッ、ゴホッ

…。

分になってしまいました。そして、  
十分ほど経ったころ…。

瀬川 あの、替わりましようか、どうぞ

…。

(電車の走行音)

男 エへへへ、すみません。…ああー

っ！(大きくよろける)

男 無、無いつ、無いつ！ 俺の財布

瀬川 危ない！(と支えて) 大丈夫です

瀬川  
美佐子

が…！  
えっ？

男 ウィッ。余計なお世話だ。(座つ

て)…あー、眠い…眠い…アワワ

ワワ…グーグー…。

だ、誰かに盗られたんだっ。あつ、  
そう言えばさつき俺の体を触りお  
つたお前、お前が盗んだに違いな  
い。

ナレーション(美佐子)

男性がご好意で、席を譲って差し

瀬川 えっ、そんな、僕が盗むだなんて！

上げたというのに、何て感じの悪

男 ええかっこして、席を替わってや

い人なんだろうと、私まで暗い気

るって言って、その隙を狙って…。

瀬川 もう一度、よくお探しになってみては？

ナレーション（美佐子）

男

昨日のテレビでも気を付けるように言ってた。紳士面して、スリを働く常習犯がおると。それがお前のことなんだ！

瀬川

お酒をたくさん飲んでいらつしやるようですし、お風邪も引かれていますようですし。少し休まれてください。

男

う、うるせーっ！ おーい、ここにスリがおるぞーっ。捕まえてくれー！

男

ハラハラしながら、私は成り行きを見守っていました。酔っ払いの罵声はいよいよ高くなり、乗客もまた、もしかしたらこの男性はスリなのではないかと、疑いの目を向けるようにもなりました。それでもその男性は何かに耐えるように口を一文字に結び、資料に眼を落としていました。

気取りやがって。おい、何か言ったらどうなんだ！ …あつ、警察、次の駅で降りて、警察官を呼び、決着を付けよう！

（ヒソヒソ話す乗客）

(電車が到着する音)

男 来い！ 俺と一緒に。…さあ、降りるんだ！

瀬川 …分かりました。(辺りを見回す)

どなたか、ここでご覧になっていらした方、証人になって頂けませんか。身に覚えがないことを言われ、困り果てております。

美佐子 は、はい！

ナレーシヨン(美佐子)

私は名乗り出すにはいられませんでした。駅長室に着いて、しばらくすると、警察の方が来られました。

警官

本当にお金を盗まれたというんですか。証拠があればすぐに逮捕しますが、そうでなければ、あなたが訴えられることになりますよ。

男 えっ、俺が捕まる？ ちよ、ちよ

っと待ってくれ、探してみるから…(身体の中をあちこち改める)。

あっ、あった、ここに。腹巻きの背中の方にあった。へへへ…いや、どうもお騒がせ。じゃあ…(そそくさと去る)。

(電車の走行音)

瀬川 ありがとうございます…本当に助かりました。

ナレーション（美佐子）

見ず知らずの私のために、最終電車までお付き合い頂いて：何とお礼を申し上げたらよろしいのやら：。

美佐子

いいえ、お礼を申し上げなければならぬのは、私の方なんです。

瀬川

あなたが私に？

美佐子

泥棒呼ばわりされてもじつと耐えていらつしゃった。私にはとても出来ないこと。頭が下がる思いでいっばいでした。

瀬川

いやーあ、私はただ、心のうちで繰り返し叫んでいただけなのです。神様が見ている、神様がご覧になっていて下さると。

私は、その言葉を聞いた途端、雨上がりの空に虹を見つけたような感動を受けました。盗っ人呼ばわりされ、腹を立てていた私のことも、神様はご覧になっているのかしら：。

神様の目に映る自分が、恥ずかしくない、時には、褒めて頂けるようにもなりたい。今日は駄目でも明日からは、きつと：きつと！



「展望車の眺め」

登場人物

- 一夫 (商社マン 三十代)  
淳子 (一夫の妻 三十代)  
長太郎 (六十歳・幼少時代)  
長太郎の父 (当時三十代)

ナレーション

ただ今より皆様を七分間の列車の旅へ

ご案内致します。

それでは出発です。(電車の出発音)

ナレーション(一夫)

私どもの娘は重いアレルギー体質です。

妻は食事制限に気を使い、毎日奮闘。私は会社の残業続きで、なかなか面倒を見てやれません。

ようやく休みが取れたので、以前から憧れていた寝台特急列車での家族旅行を計画しました。

私たちが一番後ろの展望車で景色を眺めていると、上品な白髪の老紳士が声を掛けてきました。

かわいいお嬢ちゃんですね、おいくつ？

淳子

はい、五歳になります。

長太郎 じゃあ、もう何でも食べられるな。

夕食はもうお済みですか？

いえ、まだ…。

長太郎 淳一 子夫

実は夕食を妻と二人分予約して、費用も支払い済みなんです。二人ともどうも食欲がなくて…。ハハ、年のせいですか。

一夫 は、はあ…。

長太郎 それで、ぶしつけなことでも恐縮なんです。代わりに召し上がって頂けないでしょうか。

え、あ、あの…。

長太郎 淳一 子夫 今夜の献立は、えーっと、ホタテ

貝とサーモンのオードブル。車エ

ビと白身魚のワイン蒸し。牛フイ

レのソテー。デザートはストロベ

リーアイスクリーム…。

淳一 子夫 あ、あなた…（忍び泣き）。

長太郎 （全く気付かず）私の名は佐藤長

太郎。ボーイに、そう言って召し上がって下さい。では…。

一夫 あの、ちょっと…。

長太郎 どうぞご遠慮なく列車の食事を楽し

んで下さい（去る）。

淳一 子夫 戻りましょう、部屋へ。「景色の

いい展望車にこの子を連れてゆこう」。そう誘ったあなたが悪いのよ。

長太郎 人のせいにするな！

淳一 子夫 来るんじゃないかった。アレルギー

一 夫

でなければ、今頃は食堂車に座つて（泣けてくる）おいしい物をお腹いっぱい……。

興奮するな。この子が聞いているじゃないか！

淳 子

私の身にもなつてちょうだい。今夜の食事は蒸かしたさつま芋とりンゴにするつもりで……。（イライラして）お魚やお肉はいつも三度湯がいてタンパク質を壊してから。お鍋やお皿も別々だし。お風呂の後の肌の手入れだって……。寝ている間もかゆがって、何度も目を覚まして泣くから、その都度薬を塗ってやって……。〈泣く〉

一 夫

会社を休んで、俺に君と同じことをやれと言うのか？

淳 子

もう少し協力してと言ってるの。休みの日ぐらいは！

長太郎

あの、あ、マフラーを置き忘れてしまつて。え、いや悪いと思いましたが聞こえてしまいました。ご事情もよく分からぬままお誘いして、申し訳ありませんでした。

一 夫

いえ……。

長太郎

（一人話りのように）私は妻と二人で小さなスーパーを経営し、今日まで何とか続けてこられました。苦勞もたくさんしましたが、でも、そのおかげで今の私がある

と思っています。私がまだ幼かったころの話を、少し聞いては頂けないでしょうか？

**長太郎**

日本はあの頃戦争に負け、とても貧しく、私たち子どもはいつもお腹を空かせておりました。そんなある日、私は父と汽車に乗ったことがありました。

**長太郎の父** う、うん…。

**長太郎**

(小声) 前の駅で窓を開けて買ってたね。(ゴクンとつばを飲み込み) 玉子焼きに昆布巻き、それに塩鮭…。

**長太郎の父**

これ！ 聞こえたら恥ずかしいじゃないか。駅弁食べたいか？

**長太郎** うん！

**長太郎の父** よし、じゃ次の駅に着いたら、

すぐに買ってやろう。

(汽車の走る音)

**長太郎**

(当時の幼い声) 父ちゃん、前の人の駅弁、とっってもおいしそうだね。

ほんと！(現在の声に戻る)そして次の駅に着く。窓を開け、駅弁売りを探す…いや、探すふりをする。「この駅では売っていないなあ」。…また、次の駅に着く。今

度はホームに降り立つ。キョロキョロした後、戻ってくる。「売っていたけど、あまりおいしそうじゃなかった。また次の駅で…」と、

この繰り返しでした。結局買ってもらえず、お腹はグーグー鳴り、随分父を恨みましたが、大人になってからは父親の愛情がよく分かり、私は…。

（感動して）お父様のお気持ち、痛い程よく分かります！

偉そうなことを言うようですが、生きていればつらいこと、苦しいことは山ほどあります。でも、お嬢ちゃんはよく見ておいでにな

る。あのつぶらな瞳で今のご両親のご苦労を…。それは一生の宝物となりますよ。

淳一 子夫

一生の宝物…？

長太郎

私のつまらない思い出話を聞いて

頂き、ありがとう。じゃあ…。

一 夫

待って下さい！ 今夜のお食事は

奥様とご一緒に…。

淳 子

そうなさって下さい。ぜひお二人

で…。

長太郎

…いないのです、もうこの世に私

の妻は…。

長太郎

生きていればつらいこと、苦しい

ことは山ほどあります。でも、お

嬢ちゃんはよく見ておいでにな

一 夫

えっ、いらつしやらない？

淳 子

（息をのむ）あっ…。

長太郎

ひと月ばかり前に病気で…。結婚

五十年の金婚式を祝うこの旅を、前から楽しみにしておりましたのに、治療の痛みもなく…。

淳子 そうでしたか…。

長太郎 人生は展望車から眺める景色のように先は見えませんが、通ってきた道筋だけはよく分かります。苦労というものは生きていればこそ出来るものなのですよ。

淳一 子夫 (ハツとなつて) 生きていればこそ…！

一夫 生きていればこそその苦労か…。ごめん。これからはもう少し手伝うよ。

淳子 私も頑張るわ。

一夫 何か今日のさつま芋とリンゴの味

は格別だなぁ。

淳子 ええ、ほんとう…。



《ラジオドラマ》第三回

「Mr. 棚卸し」

登場人物

雄一 (四十代／高校三年生)

時計商 (五十代)

行商のおばさん (六十代)

客

(店の扉を開ける)

客 こんちはー。

雄一 ああ。いらつしやい。

客 修理出来た？

雄一 はい、直つてますよ。

客 それはそれは。

雄一 こちらです。

客 (腕時計を耳に当て、チツチツチ

ツ…) うん、おう、動いてる。よ

く直ったね。他の時計屋じゃ直せ

ないと言われたんだが：ありがと

う、ありがとう。

ナレーション

ただ今より皆様を七分間の列車の旅

へご案内致します。

それでは出発です。(電車の出発音)

ナレーション(雄一)

私は東京の下町で小さな時計店を

営んでいます。私の家は医者の家系で、両親は私を有名大学の医学部に入学させようと、自宅からかなり離れた都内の有名進学校へ入れたのですが、レベルが高くてついてゆけず、私は落ちこぼれの生徒でした。そんな訳で高校三年生になっても、毎日ダラダラ過ごしていました。

そんなある日、授業も終わり、いつもの帰りの電車に乗りました。

(電車の走行音)

(腕時計が落ち壊れる)

**雄** 一 し、しまった！ 腕時計が！ あ

あ、壊れちゃったか。…ま、いいか。十分使ったことだし、もう寿命だな。新しいのを買ってもらう。

**ナレーション** (雄一)

落ちた腕時計を無造作にカバンの中へ放り込もうとしたその時…。

**時計商** お兄さん、ちよつと、それ…。

**雄** 一 えつ、何ですか？

**時計商** その腕時計…。

**雄** 一 ああ…壊れちゃったみたい。おじ

いさんの形見なんだけど、古くて重たいから…。

**時計商** 本当に壊れているのかなあ。どれ、

私に見せてもらんなさい。

雄 一 あ、はい。

時計商 うーん、壊れちゃいない。道具が

あれば、すぐに直せるんだが…。

雄 一 直せる？ おじさんが？

時計商 ハハハ：実はおじさんは自分で言

うのもなんだが、腕の良い時計職

人なんだ。それにしてもこれは年

代物の立派な腕時計だ。ほればれ

する…。

雄 一 気に入ってくれたんなら、おじさ

んにあげてもいい。

時計商 バ、バカなことを言っではいけない。

い。人に上げたりしたらおじさ

んが悲しまれる。

雄 一 出来の悪い僕が使うよりもかえつ

て喜んでくれるよ。

時計商 えッ、出来の悪い？

雄 一 うん、良いところが一つも無いん

だって。今日も先生から言われた。

進学の相談会で、「お前は理数系

が苦手で、国語の力も弱い。運動

神経は鈍いし、その上音痴。褒め

るところがない」って。

時計商 (笑って) そんなにたくさん、よ

く人をけなせるなあ。

雄 一 生徒の欠点ばかり見つけるので、

「Mr・棚卸し」ってあだ名が付

けられているんだ。

時計商 君、「棚卸し」というのは、帳簿

と手持ちの商品とを照らし合わせ、今持っている価値ある資産を確認すること。それが「棚卸し」の本来の意味なんだ。

雄 一 その「価値ある資産」というのが、僕の場合、一つも無いんだ。

時計商 ただの一つも？

雄 一 英語検定の資格を持っているとか、コンクールで一等賞をもらったとか…。そんな勲章が僕には一個もありません…。

時計商 なるほど…。

(駅に到着する)

(乗客が乗り降りする)

おぼさん ごめんなさいよ、どうもすみません。

ナレーション(雄一)

そのとき、顔見知りの行商のおぼさんが乗り込んできました。

雄 一 おぼさん、今日もお疲れー。さ、ここに腰を下ろして。

おぼさん どうもありがとう。でもほら、今日はたくさん売れたから、気分が

良くて、ちっとも疲れちゃいない。あんたはそのまま座っていないかい。

雄 一 僕は大丈夫。「腰が痛い、痛い」

って、昨日もそう言ってたじゃないか。早く座って。

おぼさん じゃ遠慮なく。よっこらしよ。な

あー、あなたは今朝もお年寄りに席を譲っていたね。一時間半も掛けて学校へ通ってるんだから、疲れているだろうに。

**時計商** 一時間半？ 君は一時間半も掛けて学校へ？

**雄一** え？ ええ。中学へ入った時からだから、もう六年間…。

**時計商** 六年間？

**雄一** 本を読んだり居眠りしたり。…あ、時には折り紙折ったり。

**時計商** 君が折り紙？

**おぼさん** このお兄ちゃん、手先が器用なんですよ。千羽鶴いつも折ってくれて。病気で入院している子どもた

ちがとっても喜んでくれているんです。

**雄一** うれしいなあ。

**おぼさん** はい、そのお礼、残り物で悪いけど。

**雄一** あっおいしそうなおまんじゅうだ。家で待っているおばあちゃんにもあげよう。ありがとう。

**おぼさん** こちらこそ！

**おぼさん** あ、駅に着いた。じゃ、さよなら。

また明日…。

**雄一** おぼさんも気を付けてね。

**おぼさん** はい、ごめんなさいよ。はい、すみません…。

(電車の走行音)

時計商 き、君、君！

雄 一 え？

時計商 「棚卸し」出来る資産を、君はい

くつも持っている！

雄 一 僕が？

時計商 そうだ、君は持っているんだ。ま

ず第一に――。

雄 一 第一に？

時計商 中学高校の六年間、往復三時間余

りの道のりを、雨の日も風の日も

休まず通学し続けたこと。病院で

治療を受けている子どもたちにお

見舞いの千羽鶴を折って届けてい

ること。誰にでも優しく接するこ  
とが出来ること。ゼーんぶ君の資  
産じゃないか。

ナレーション(雄一)

一週間後、私はおじさんの店を訪  
ね、完璧に直った腕時計に感動し  
たのです。

ナレーション(雄一)

あれから二十数年。私は今、誰か  
らも頼りにされる時計職人となる  
ことが出来ました。

あの日、私の「棚卸し」をしてく  
れたおじさんのおかげなんです。

「生命いのちときめく希望のかけ橋」

(嵐の音)

(電車が急停車する音)

登場人物

春江 (八十代)

茜 (学生・二十一歳)

車掌

春江 どうかしたのかしら。止まってしま

まった。駅でもないのに…。

車掌 (車内放送) お知らせ致します。

ただ今、赤信号のため停車致します。

す。

春江 えっ、こんな橋の上で？

ナレーション

ナレーション (春江)

ただ今より皆様を七分間の列車の旅へご案内致します。

それでは出発です。(電車の出発音)

私、野上春江。八十の半ばを過ぎています。年の割に元気で、今日も親類の法事に出掛け、帰りは夕刻となつてしまいました。列車に

乗った時には晴れていた空が見る

茜 食べたくありません。

見るうちに曇り、次第に嵐のような悪天候となつてしまいました。

春江 じゃ失礼して…、うー、思ったより酸っぱい！

それだけでも気が重いところに、列車が止まつてしまふなんて…。

茜 (突然吐き気を催した様子) うつ…うろうう…。

私の隣には若い女性が座っていました。

春江 どうなさつたの？  
茜 そのミカン。匂いが。すぐにしまつて！

そのうちに動き出すんじゃないですか。

春江 は、はい…。  
(ハツとなつて) あなた、も、もしかして…。

そうね、イライラしたって始まりませんものね。おせんべいでもいかが？

茜 嫌になつちやう。自分の体なのに思うようにならない。だるくて何ものど通らなくて…う、ううう…。

結構です。

春江 じゃミカンは？

春江 ごめんなさい。しまいました。でも

赤ちゃんが産まれる、とてもおめでたいことじゃありませんの。

茜　：あたし、産むつもりはないんです！　う、う、う…。

### ナレーション（春江）

嵐はますます強くなってきました。いつまで経っても列車は動き出しません。若い女性は、ぽつぽつと身の上を話し始めました。彼女は茜さんと言い、二十一歳の学生。医学部の学生と知り合い、恋人となりはしたものの、相手の両親からまだ若いからと結婚を反対され、その上、子どもが出来たこ

とを知った彼は、別れようとさえ言い出したそうです。

### 茜

田舎の両親に相談に行ってきたんです。でも、「ふしだらな娘は勘当だーッ。」って（泣く）。もう、どうしたらいいのかわからないんです。

### 春江

茜さん、恋をすることが出来る人間って、素晴らしいとは思いませんか？

### 茜

素晴らしい？

### 春江

一日中その人のことを思い、命を投げ打っても尽くしたい、そんな純粋な思いを持てるのは人間だけ

かも。だから私はいつも思うの。一生のうち、たとえばどんなに短い間だけでも、そう思える人に巡り合えた幸せを感謝しなければつて。

春 江

五歳だったわ。かわいい盛りの子。主人と二人でたまたま乗り合わせた列車が、嵐に遭って…。今夜のような大雨で山が崩れトンネルの中で…。

茜

感謝なんて出来ません。結婚出来ないんですもの。

(落石の音)

春 江

でも生きているじゃないの！ その上、その方の分身も、あなたの体の中で息付いている。あたしにはいない。もういないのよ。愛する夫もかわいい子どもも…。

春 江

列車ごと土砂の下敷きに。それがこの先の長いトンネル。もう何十年も昔のこと―。

茜

…い、いない？

春 江

あたしたちの命だって、いつどうなるか分かりやしない。あたしたち人間は、何か目には見えない大

(雷鳴)

きな不思議な力によって生かされ  
：生きているのよ。

**茜** ……生かされ……生きている？

**春江** うん、茜さん、せっかく頂いた新しい命、もう一度、彼とよく話し合って…。苦労は多いと思うけど、勇気を出して、元気な赤ちゃんを産んでね。

**茜** ご、ごめんなさい。馬鹿な考えを起こしたりして…。

**春江** 良かった！ 分かって下さって…。彼のところへこれからすぐ行つてきます。

**春江** お相手のご両親だって、あなたの親御さんだって、かわいいお孫さ

んのお顔を見ればきつと…。新しい命ほど光り輝いているものはありませんもの。

**車 掌** ご迷惑をお掛け致しましたが、間もなく発車致します。



「ちよつと一服」

(小鳥のさえずり)

登場人物

実

(サラリーマン／五十歳)

妙子

(実の妻／五十歳)

祖父

(故人)

妙子

(遠くから) あなたー、出掛けま

すよー!

実

ああ、今一服してから。

妙子

列車の時間に間に合わなかったら

どうするの。早く、早くー。

実

朝の縁側での一服、このうまさ、

たばこを吸わないやつには分から

んだろうなあ。さて、今日も頑張

ろう!

ナレーション

ただ今より皆様を七分間の列車の旅

へご案内致します。

それでは出発です。(電車の出発音)

ナレーション (実)

今日は、妻と一緒に地方の親類の家の農作業を手伝いに出掛ける日

である。いつものようにたばこを吸いかけ、時計を見上げ、家内の言う通り時間が無いと知った私は、慌ててたばこの火をもみ消し、庭に捨てるや玄関へ向かった。

**妙子** 道端に投げ捨てられたゴミを拾ってせつせと袋に入れている…。

**実** 吸い殻も拾っている。子どもたちに拾われては立つ瀬がないな。

**妙子** それでも禁煙しようとは思わないの？

**実** それとこれは別。俺は道路に吸い殻をポイするようなマナー違反はしない。

**実** おーい、待ってくれー。

(駅へ向かう)  
(子どもたちの声)

(列車の走行音)

**実** おい、ちょっと、見てみる。

**妙子** 何ですか？

**実** (念を押すように) ここは禁煙車だよな。

**実** あれは家の近くの小学校の生徒たちじゃないか。

**妙子** 当たり前じゃないの！ 吸いたけ

れば隣の車両に喫煙ルームがある

から。でも少し辛抱出来ないの。

**実** いやあ、今朝、時間がなくてゆっく

り吸えなかったからなあ。

**妙子** もう…。

**実** ではちよつと失礼して…。どうも

近頃は、たばこが吸いづらくなっ

たもんだ…。

(田園地帯)

**実** いい気持ちだなあ。青い空、広々

とした畑。

うーん、空気がおいしい。キュウ

りも茄子も大きく育ってピカピカ

**妙子**

光っている。うまそうだなあ。今

夜はもろキュウと茄子の天ぷらで

ビールだな。さア、刈り取るぞー。

あたしたちつて、いいところ取りな

のね。雑草を引っこ抜いたり、害

虫の退治なんかは、お義兄にいさんの

家族に任せきりだし、一年にたつ

た数回のことだから、一生懸命お

手伝いしなければ。おいしいお野

菜が、ただで頂けるんですもの。

ヤッホー！

ちよつと、「ヤッホー！」ていう

のは山で叫ぶ言葉だぞ。

ハッハッハ…。

**妙子**

**実**

**実** さあ、そろそろ始めよう。

**妙子** はーい！

**実** ここに来ると、なあ、おじいちゃんのことを思い出すんだ。もう四十年も昔のことだけど、俺は夏休みには決まって手伝いをしに来てたんだ。：あ、そう言えばおじいちゃん、作業を始める前にも後にも必ず畑に向かって手を合わせていたなあ。

**妙子** 畑に向かって？ どうしてなのかしら…。

**実** さあ、どうしてだったかなあ。おっ、大きなキュウリだ。

**妙子** この茄子もおいしそう。

**ナレーション（実）**

お蔭で収穫作業は順調にはかどり、夕方には用意した籠に野菜が一杯となりました。私はホツとして、畑の脇に腰を下ろし、たばこに火をつけました。

**実** あー、うまいなあ！ ひと仕事終わった後のたばこはサイコー！

**妙子** あなたー。列車の時間に遅れるわ

**実** よー、先に行くわよー。  
ま、待ってくれー。

**ナレーション（実）**

私は吸っていたたばこをそのまま

畑に投げ捨て、妻を追いかけてよう  
としました。その時、

祖父

(厳かに) 大地というものはどん

祖父 おまえの灰皿は大きいのう。

実 えっ？

(列車の走行音)

妙子 どうかしたの？ 疲れたの？

実

そう、そうなんだ！ だから手を  
合わせていたんだ。ごめんさい、  
抱かれている私たち。有り難いの  
う…。

実 いや…

妙子 じゃ、どうしたの？

おじいちゃん…。

実 聞こえたんだ。畑でおじいちゃん

妙子 あなたのおじいさまのお気持ち、

の声が…、「おまえの灰皿は大き  
いのう」って。

私にもよく分かりました。

ナレーション(実)

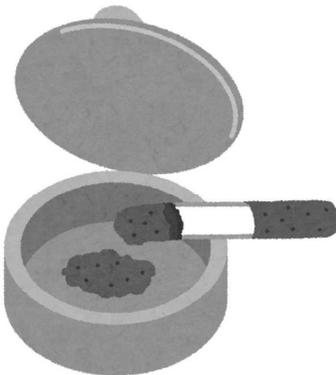
私は、畑に手を合わせていた祖父の姿を思い浮かべ、大地に感謝して生きてゆかなければと、心の底から思ったのでした。

(小鳥のさえずり、朝の光景)

妙子 あなたー、会社へ出掛ける時間ですよー。

実 ちょっと一服…。

あつ、吸い殻は灰皿に、と。ね、おじいちゃん！



《ラジオドラマ》第六回

「舞い降りた花びら」

登場人物

伸子 (専業主婦／五十六歳)

道太郎 (伸子の兄／六十歳)

君 (伸子と道太郎の母)

／八十代後半)

紀子 (パート／二十八歳)

太郎 (紀子の息子／八歳)

それでは出発です。(電車の出発音)

(電話の着信音)

伸子 はい、もしもし、あっ、お兄ちゃ

ん。何か急用でも？ …えっ、お

母さんを家で預かってほしい？

道太郎 頼むよ。会社を今度定年退職する

だろ。社宅から引き揚げなきゃな

らないんだ。次の住まいが見付か

るまでの間…。

伸子 じゃあ、ひと月ぐらい？

道太郎 う、うん…。

伸子 (渋々) 仕方ないなあ…。

道太郎 恩に着るよ、伸子。

ナレーション

ただ今より皆様を七分間の列車の旅

へご案内致します。

伸子 じゃあ、今度の日曜日に、お母さ

ん迎えに行くわ。

(電車の進行音)

ナレーション (伸子)

その日はお花見シーズンも終わりに近付き、車内は空すいていました。久しぶりに会った母はすっかり年老いてみえました。

近頃、母と意思の疎通が難しくなつたことを兄から告げられ、心が重くなりました。食事はのどに詰まらせないものを作れとか、お風呂には付き添えとか、散歩にも連

れていくようにと頼まれた私は  
…。

伸子 あーあ、大変なお荷物引き受けち

やつた…。

君 そんなに大きなため息をついたり

して、どうかしたのかい、伸子：窓の外を見てごらん。桜の花が散り始めている。チラチラ：チラチラって奇麗だねえ…。

(扉が開き、子連れの母親が

乗り込んでくる)

道太郎 わーい、空いてる！ ここがいい！

ママも早くーっ！

**紀子** ハイハイ、よいしょっと。(荷物

を置いて座る) 遊園地、楽しかったわね。ママも一緒に楽しんじやうた。さ、早くお弁当を食べましよう！

**道太郎** いただきまーす。

**ナレーション(伸子)**

ところがお弁当を食べ終えたその若い母親は、幾分中身を残したまま、折り詰めを無造作に座席の下に放り込んだのです。

**道太郎** ママ、学校の先生から、「ゴミは

くず籠に」って教わったよ。

**紀子** 電車にはね、お掃除を専門にする

人がいるの。ここに置いといてもいいのよ。

**道太郎** でも先生は、「それが社会のマナ

ーです」って。

**紀子** マナーってみんなが普通にやって

いること。人は人、自分は自分、気にしなくてもいいの。

**ナレーション(伸子)**

「ち、違います！ 社会人として守らなければならぬ決まりです、マナーっていうのは」と、思わず声を上げそうになったそ

の時…。

君

(イキイキとした声) ミイちゃん

…さあ、こつちへおいで。お飯

(まんま) があるよ。今夜はご

ちそうだねえ…。

伸子

(びっくりして) お母さん、何を

訳の分らないこと言ってるの？

君

好き嫌いしてお前たちが食べ残し

てしまったおかずはいつもミイ

ちゃんに食べさせてあげたじゃ

ないか。

伸子

どうかしたの、お母さん、この電

車の中に猫なんか…！

道太郎

(回想) お袋、このところ変なも

のが見えたり聞こえたりするよう

なんだ。幻覚っていうやつなんだ

ろう。

伸子

…あ、これがその…。

君

ミイちゃん、いい子だねえ。

ナレーション (伸子)

そんな母の姿を見て、私は五十年

以上も昔のことを思い出しまし

た。

(猫の鳴き声)

君

(若き日の凜とした声) 伸子！

道太郎！　どこで拾ってきたの？

君　まあ、あんたたちは…（泣く）

…可哀想に。こんな地震えて…。

よしよし…ミイミイって鳴くから

ナレーション（伸子）

ミイちゃんって名前にしよう。で

あの時、母は突然顔を覆ってワッ

も、大家さんから、生き物は飼っ

と泣き出したのでした。

ちやいけないって…。

私たちはびっくりして泣き止んだ

伸子

（幼き日の声）お母さん、この子

伸子

ねえ、お母さんはあの時どうして

猫ちゃんは捨てられちゃったんだ

泣いたりしたの？

よ。お父さんもお母さんもないなく

それはうれしかったから。ありが

てひとりぼっちで寂しいから泣いて

君

たかったから。

んの。

道太郎

帰るおうちがないなんて、僕は嫌

伸子

（意外そうに）ありがたい？

だ。家に置いてやって！

君

行く当てがなく鳴いている子猫を

伸子

可哀想だ。

見て、可哀想だと思う優しい思い

道太郎

可哀想だよー！（二人して泣く）

やりに満ちた子どもたちに育って

くれたことがありがたくて：ありがたくって、うれし涙があふれて：。

### ナレーション（伸子）

私たちの成長を心から喜んでくれた母。

産んでもらい、育ててもらったという恩を忘れ、老いた母親をお荷物のように感じていた私。今こそお母さんに恩返しが出来るときなんだ！ 桜の花びらが空からたくさんチラチラ：チラチラ舞い降りて来るように、そんな思いが私の体をすっぽりと覆い尽くしたのでし

た。

私は夢中で、電車のデッキへ飛び出して行きました。

### 伸子

（電話）あ、もしもしお兄ちゃん、あたし。：お母さんずっと私ん家にいってもらってもいいのよ。：えっ、どうして考えが急に変わったかって？ それ：それは誰かが、私の心に春風を運んでくれたの：。



「いつまでもいつまでも」

登場人物

まこと (男性／六十代)

ポチ (老犬)

悦子 (四十代)

緑 (十六歳)

車掌

ナレーション

ただ今より皆様を七分間の列車の旅へ  
ご案内致します。

それでは出発です。(電車の出発音)

(苦し気に鳴く犬の声) クーン、クーン

まこと ポチ、苦しいか？ つらいだろう

なあ。出来ることなら代わってや  
りたい。ポチ、ポチー！

ナレーション (まこと)

私は十八年前に離婚して以来、一  
人で小さな印刷工場を運営してき  
ました。女房と別れたころ、川っ  
ぷちで鳴いてた子犬を拾ってきて、  
「ポチ」と名付け、十八年間家族  
として暮らしてきました。そのポ  
チが今、息を引き取りかけている  
んです。せめてあと一年でも、と

に転がり落ちてきました。

切羽詰まり、神様をお願いしようと、教会へ向かう電車で飛び乗りました。

まこと おっと…。

悦子 あっ、すみません。

まこと (お愛想で) 可愛らしい熊ちゃん  
ですなぁ。

悦子 家族と同じなんです。

まこと (心の声) 何言ってるんだ、いい年  
して。だけどいいよなあ、人形は  
死んだりしないもの…。

### ナレーション (まこと)

気が急せいでいるせいか、電車の速度はいつもより遅い感じがしました。ポチはお向かいの奥さんに頼んできたから大丈夫だとは思いますが、れど、こうしている間にも…と、心配していると、隣の席の中年女性が網棚から荷物を下ろし、中から熊の縫いぐるみが私のひざの上

### ナレーション (まこと)

そんなことを思っているうちに、電車はトンネルの中へ入っていき  
ました。しばらくすると…。

(電車が急停車する)

まこと どうしたんだ、こんなトンネルの

中で…。

悦子 変ですね。

車掌 お知らせ致します。信号機の故障

のため、しばらく停車致します。

まこと な、何？

悦子 困ったわ。早く着かないと。

ナレーション (まこと)

その時、車内灯がすーっと暗くなつて、もやのようなものが車内に立ち込めてきました。

まこと 何にも見えなくなってしまうし

たねえ…。

悦子 よく見ればうつすら人影が…。

まこと いや動物もいる！ それもいっば

い！

ポチ (苦しげに鳴く) クーン、クーン

まこと ポチ、ポチじゃないか！

ポチ (更に苦し気に) クーン、クーン

まこと 苦しいか、ポチ、ポチー！

悦子 (気付いて) 緑、緑ちゃんツ！

緑 お母さん！ どうしてこんな所へ？

悦子 お前の可愛がっていた熊の縫いぐ

るみを届けにやってきたの。うっかりお棺の中へ入れるの忘れてしまったものだから。

ナレーション（まこと）

私はびっくりして、その緑という名の娘と女性の会話を聞いておりました。あの世かこの世か分からない不思議な世界へ迷い込んでしまったようです。

悦子

お母さんの方こそ、緑がいるから、どんな時にもくじけず強く明るく生きてこられた…楽しいこともたくさんあった…。

緑

お母さん、届けてくれてありがとう。でも縫いぐるみを持っていないけれども、私、ちっとも寂しくないのよ。

ポチ

（以前にも増し苦し気に）クーン、クーン

悦子

どうして？

緑

お母さん、あたしの隣のワンちゃんがあたしに…。

緑

あたしは生まれた時から重い心臓病で十八歳になるまでずっとお母さんのお世話になって生きてきた

まこと

緑

えっ、ポチが何か？  
苦しげに鳴きながらこんなことを言っているの。

ポチ おいら、飼い主のまことさんのこ

ナレーション（まこと）

とが好きで好きでたまらないんだ。商売がうまく　いかなく  
て困るだとか、客が来ないから嫌  
になっちまうだとか愚痴ばかりこ  
ぼすんで、その度ペロペロなめち  
やあ、いつも慰めてきた…。

今の今まで私は、自分がポチを支  
えてきたのだとばかり思っていま  
した。しかし、ポチの方が私を力  
付け励ましてきてくれていたのだ  
と、今ようやく気が付いたのでし  
た。

この先まことさん独りでもちゃん  
と生きていけるかどうか心配で

まこと ポチ、安心しろ。もう愚痴をこぼ

…。

したり、不平不満を言ったりは決  
してしない！　仕事も頑張る！

まこと えっ？！  
ポチ それを思うと苦しくて、なかなか

ポチ （笑って）そんなに力まなくたつ

あっちへ旅立つことが出来ないん  
だ。

て。これから先だって、私たちは  
ずっと支え合っていていけるんだよ。

まこと ポチ！

悦まこと  
悦子 これから先もずっと？

ポチ 一緒なんだよ。

緑 そうなの。これから先もずっとず

っと！

ポチ お互いの心さえつながっていれば

…。

まこと ポチー！

悦子 緑ー！

ナレーション(まこと)

私が気付いて辺りを見回すと、車内は元通り明るくなっており、何事もなかったように電車は走り続けていました。隣の女性客もいませんでした。

まこと 夢、今のは夢だったのか…。

ナレーション(まこと)

教会に着いて、ポチと楽しく暮らさせてもらった日々のお礼を神様に申し上げていると、お向かいの奥さんから電話で、ポチがたった今、安らかに息を引き取ったとの知らせがありました。

まこと ポチ…とうとう…そうか、安らか

だったのか。良かったなあ。

ナレーション(まこと)

つらい悲しいとかの思いにも増

し、私の胸は大きな感謝の気持ち  
でいっぱいになりました。

神様から同じように尊い命を賜  
り、助け合い、いたわり合って過  
ごして来たポチ。ありがとう。こ  
れからもよろしくな。



「みんな英雄」

ナレーション

ただ今より皆様を七分間の列車の旅へご案内致します。

それでは出発です。（電車の出発音）

登場人物

美奈子（専業主婦／七十代）

耕造（美奈子の夫／八十歳）

洋介（作業員／二十代）

毬江（ホステス／二十代）

男の子

乗客A

乗客B

乗客C

（地下鉄の走行音）

美奈子 詰まらなかったわねえ、今日の映

画。

耕造 え？ 何と言ったんだい？ もう

少し大きな声で言ってくれ。さっ

ぱり聞こえん。

美奈子 今日の映画、面白くなかったわね

って、そう言ったんです。

耕造 筋なんか忘れてしまった。

(あくびをしながら) 馬が出てきたようだな。

**穂江**

(小声で鋭く) 分かった、よく分かったわ。あんたは私の体が目的でこれまで付き合ってきたのね。

**美奈子**

寝てしまったの？ 面白くなかったんじゃないの。来るんじゃないの？

**洋介**

それが悪いとでも言うのか？ 男と女はそれぞれ違う。優しかったり力強かったり、固かったり柔らかかったり。互いにそれを確かめ合うためにさあ…。

**ナレーション (美奈子)**

友人から夫がもらってきた映画の試写会の招待券を持ち、家をいそいで出てきはしたものの、上映時間が長く疲れ果て、地下鉄の中で夫は熟睡、私もウトウトしてました。すると、隣の席から突然言い争うような声が聞こえてきました。

**穂江**

体だけじゃなく、心の中まで愛してくれなきゃ嫌！

**洋介**

心の中？ レントゲン撮っても見えやしない。無理、無理。

**穂江**

…あんたって、ほんとに頭の中が空っぽなのね。

洋介 何だと！

穂江 次で下りる。これ以上付き合っち

やいられない。さよなら！

洋介 ま、待て。待てよー！

(穂江の腕をつかむ)

穂江 イタツ。アイタタタ…。放して、  
放してー！

美奈子 ちよつとあなた、女の人に乱暴は

いけません！

洋介 何！ ババアは引っ込んでろ！

美奈子 ババア!?

ナレーション(美奈子)

何て失礼なことを言う人なのでし

よう。オロオロしながら様子を見

守っているうち、地下鉄は次の駅

に到着しました。乗客の降り降り

が済んで、ドアが閉まりかけたそ

の時…。

男の子 痛い、痛いよー、ママー！

ナレーション(美奈子)

見れば五歳くらいの男の子が、ド

アに手を挟まれ、大声で泣き叫ん

でいるのでした。母親が必死に子

どもの手を引き抜こうとしている

ものの、ドアはびくともしません。

美奈子 あなた、大変！

耕造 うん？

(目覚めて) ど、どうした！

乗客A どっかに非常停止ボタンがあった

だろ！

男の子 痛いよー、ママー！

洋介 ちよっとどいてくれ。おれに任せ

耕造 こ、こりゃ大変！ どうしたらいいんだ！

ろ！

美奈子 どうしたら…。

ナレーション(美奈子)

耕造 よしわしが！(立ち上がりかける

とその時、人々を押しわけ、あの

がすぐ転ぶ) イタツ。腰が。アイ

男が、何と力づくでドアをこじ開

タタタ…。

け、坊やを救い出したのでした。

美奈子 大丈夫？ あなたしっかりー！

耕造 アイタタタ…。

(ワーツと叫ぶ乗客の歓喜のどよめき)

乗客A 車掌さん、ドア、ドアを開けて！

(パチパチ鳴る大きな拍手)

乗客B まだ発車しないでくれー！

乗客C 車掌だけじゃなく運転手にも知らせたほうが！

洋介 大丈夫かい？

樋江 骨は折れちゃいない？

男の子 うん、何ともない。

毬江 すごい！ あんたって。随分力が

あるのね！ さすが！

洋介 ウフフフツ、それ程でもねえ。ほ

れ直したか？

毬江 何言ってるの。前からずつとあん

たのことが大好きだよ。

洋介 (照れて) え、そうか？ エヘヘ

へへ。俺もだぜ。(毬江にキス)

毬江 やだ、人が大勢見てるじゃないの。

洋介 いいじゃん。俺、結婚式の時はみ

んなの前でブチュウしてしようと決

めてんだからさ。

毬江 ええ！ それってプロポーズ！？

プロポーズなの！ うれしい！

洋介 そうだ、そうだよ。わっはっはっ

…。

洋介 毬江 わっはっはっ…わっはっはっはっ…。

(夜の街音。犬が鳴いている。足音)

美奈子 あなた。良かった。本当に無事で

良かったですね…。

耕造 一時はどうなるかと心配したが。

美奈子 皆さん、心を合わせ協力してまし

たねえ。だけどあたしたち、何の

お役にも立てませんでしたね。年

を取るって悲しいことですわ。

耕造 いや、そうとも限らん。年を取っ

ても出来ることがある。

美奈子 …え？

耕造 祈ることじゃ。

美奈子 …お祈り？

耕造 私はずっと転んだままだったが、

祈っていたんだ。「今、痛い」と泣

いているあの子をどうか助けて下

さい」と神様に。

美奈子 祈ること…あ、それなら私にも…。

今の世の中、他人に無関心、自分

本位だと言われていますけど、捨

てたもんじゃありませんね。

耕造 うむ…いざ困っている人を見かけ

たら放ってはおけない、そんな温

かい心を、私たちは神様からもら

つとるのかもしれないなあ。

美奈子 ほんとにそうですね。人を助けて

こそ人間なんですね。

耕造 映画より感動したなあ。

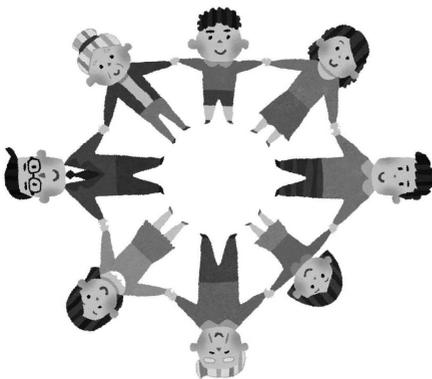
美奈子 みんな映画の主人公になりますね！

耕造 他人を助ける英雄になれるんだ！

美奈子 あなた、また映画観に行きましょう

ね。

耕造 今度は寝ないぞ。アツハツハ…。



「危うくキタマクラ」

登場人物

敏男 (四十歳)

通子 (敏男の妻／三十八歳)

弥生 (長女／十二歳)

健一 (長男／八歳)

正造 (六十三歳)

車掌

乗客たち

ナレーション

ただ今より皆様を七分間の列車の旅へご案内致します。

それでは出発です。(電車の出発音)

(岩肌に叩きつける波の音、海猫の鳴き声)

通子 …あ、あなたー、あなたー！

敏男 …。

通子 (敏男を見付けた様子) あなた、

…あっ、危ない！ どうかした

の？ こんなに高い崖の上で。足

でもすべらせたら大変！

敏男 う、ああ。あそこを飛び回ってい

る海猫を見ているうち、俺もあんなふうになんか自由に飛び回れたらなあつて……。

**通子** 何言ってるの。戻りましょう。時間間に合わなかったら大変……。

### ナレーション（通子）

うちは先祖代々酒屋ですが、このところ駅前に出てきた大型スーパーに押され、売り上げが思うように上がらず、夫は毎日頭を痛めている様子でした。そこで、家族そろって気分転換を図るため、釣りを楽しもうと、海へ出掛けてきたのでした。

**弥生** お父ちゃん、たくさん釣れてよかったねッ。

**健一** 駅に着いたら駅弁買って！

**通子** 弥生、健一、あんたたちの大好きなカワハギがこんなにいっぱい獲れたんだから、夕飯は天ぷらにして食べましょう。

**健弥 一生** わーい、カワハギ、カワハギの天ぷらだーっ。わーい。

（列車の進行音）

**通子** ハア……ハア……ハア。乗り遅れるところだった。二人とも、大丈夫？

**健弥 一生** （口々に）お母ちゃん、疲れちゃっ

た…。

**通子** 空いてればいいのに。あつ、あそ

こが空いてる。

(大いびきの音)

**ナレーション (通子)**

その空いている席の横には、見るからにお酒に酔いつぶれた男性が寝そべっていました。

**通子** (プリプリしつつ) 他の人が座れ

ないじゃないの。でもここしか空いてないから仕方ないか…。

すみませーん (正造に声掛け)。

少し狭いけど、座らせてもらって眠っていきなさい。

**敏男** 魚の入ったバケツ、ここに置

いておくか。

(正造のかく大いびきとゲップの音)

**弥生** 臭ーい!

**通子** 我慢、我慢。こんなになるまで飲

まなくたっていいのに。お酒なんて百害あつて一利なしね。やだやだ…。人に迷惑掛けるお酒売って毎日暮らしているのね、あたしたち…。

**敏男** 嫌いか? 酒屋が…。

通子 はい、大っ嫌い。

敏男 …じゃ、辞めよう。

通子 えっ？

敏男 酒屋を辞めてしまおうかって言っ

てるんだ。

通子 …あ、あなた…！

通子 悪い冗談言うのはやめて。

敏男 …実は、…かなり借金があるんだ。

(列車の急ブレーキ)

通子 えっ、そんなにあるの？

敏男 三代続いた店だから潰したくない

乗客たち (口々に) わっ、どうした、ど

けど、近頃、店の売り上げは激減

してるし、続けてても伸びる見込

うしたっ。何が起きたんだ？

みはない。子どもたちの教育費だ

(バケツの水がこぼれる音)

ってかかる一方だし…。

通子 じゃ、どうすれば…？

正造 わぁー冷めてえ。誰だ、こんなと

敏男 どうしようもない…。

ここにバケツ置いたりしたのわ！

酔いがさめちまった…。

敏男

す、すみません、すみません。すぐに片付けます。今、釣ってきたカワハギなんです。

正造

カワハギだっ？ えっ、どれ…（のぞき込む）。

違う！ こ、こ、こ、こいつは、

キタマクラ！

敏男

何？ 何ですって？

正造

キタマクラ。姿形はカワハギに瓜二つじゃが、一口でも口に入れたならば最後、あつという間にあの世行き。北を枕に横たわる、それは恐ろしい魚だ。

通子

あ、あなた…！

敏男

夕飯に一口でも食っていたら…。

通子

一家そろって…ああーっ！

車掌

お知らせいたします。先程、鹿が線路内に立ち入り、急停車致しましたが、間もなく発車いたします。

敏男

鹿じゃない！

通子

…えっ？

敏男

列車を止めてくれたのは鹿じゃない、鹿じゃないんだ。

通子

…どういうこと？

敏男

通子、俺たちいつもどんな時にも仲良くしていたな。

通子

え、ええ。…だって、あたしたち

夫婦なんですもの……。

敏男

そんないい女房と子どもを残して海へ飛び込もうなんて……馬鹿な考えを起こしちまった俺に神様が……神様が……！ 助けてくれたんだ……。

通子

ええ、ええ。きっとそうですよ。

敏男

助かった、本当に助かった。……う……う……う……（うれし泣き）。

健弥 一生

（びっくりして口々に）どうかしたの、お父ちゃん、泣いたりして。

通子

お腹が空いちちゃったんですって。ね、お父さん。

敏男

うん？ ああ、駅弁も買い損なっちゃったし。

健一 おなか減ったね。

正造 あのお、なあ……。

通子 あら、おじさん。

正造 あの……これ、俺のいなり寿司ですよ

……

通子 あら、どうもすみません。本当に

……

正造 ああ。ゆっくりお上がり。

健弥 一生 わー、どうもありがとう、おじさん。

……

敏男 通子、これからも二人で仲良く酒

屋を続けていこうな。なあに、必

死になつて働けばいいんだ。

通子 そう言えば、お酒は「百薬の長」

## 車 掌

って言いましたっけ。ほほ…ほほ  
…ほほほほ…。

はい、頑張ります！ あたしも。

まもなく希望ヶ丘ー、希望ヶ丘ー。  
終点でございます。



**金光教本部 ラジオ放送係**

**住所** 〒719-0111  
岡山県浅口市金光町大谷320

**電話** 0865-42-6453

**FAX** 0865-42-2114

**メール** w-master@konkokyo.or.jp

# KONKOKYO

北海道放送	土曜日	あさ5時10分
東北放送	日曜日	あさ5時00分
ニッポン放送	日曜日	あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ5時25分
和歌山放送	日曜日	あさ6時50分
朝日放送	水曜日	あさ4時50分
山陽放送	日曜日	あさ6時35分
中国放送	土曜日	あさ5時50分
南海放送	日曜日	あさ6時00分
RKB毎日放送	日曜日	あさ6時50分
宮崎放送	日曜日	あさ7時10分

ここで聴くおはなし

検索

